
白い翼をはためかせ

ふるーつ

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

白い翼をはためかせ

【コード】

N0898D

【作者名】

ふるーつ

【あらすじ】

とある少女が所有するルビーに狙いを定めたキッド。しかし、キッドを前にした少女の反応は意外なものだった。オリキャラがメイングエストです。

前編・紹介

「おし、完了！」

小さく、しかし元気に呟いたのは、今しがたまで自分の顔をいじっていた『警官』。

彼は、そばに横たわる男を見てニヤツと笑った。彼とまったく同じ顔。ただ違うのは、熟睡している事と、下着しか着ていない事。

「お顔とお名前、拝借しますよ、柘植^{つげ}さん」

もう慣れてしまった言い回しを眠る男に使うと、彼 怪盗キッドは颯爽と去っていった。

今回の獲物は、日本列島からそう遠くない離島にある別荘に買い取られた、ルビー。

とある機械メーカーの会長が、孫娘に贈った物らしい。なんでもその孫娘は生まれつき体が弱く、数年前に自宅からそこに移ってから、ほとんど島を出たことがないんだとか。

「警部！全員そろいました」

「よし！これから島へ向かう。キッドはどんな細工をしてくるかわからん。気を抜くなよ！」

今日は予告の日。時間はおそらく夜だが、会長の要望で、昼には島に入る事になっている。

報道陣は一切なし。というのも、船で簡単に行ける距離ながら、島全体が会長の私有地であるため、許可がないと上陸できないのだ。

「ああ、ようこそ中森警部！お待ちしておりました」

「どうも会長。早速ですが、ルビーは今どこに？」

「ああ、多分孫が、自分の部屋にしまっているでしょう。礼依さん、ちよつと持ってきてくれ」

「かしこまりました」

そう言つて会長の側を離れたその女性は、とんでもない美人だった。

「そうそう。お孫さんにも、一度お会いしたいんですが、よろしいですか？」

中森警部の提案に、会長は頷いた。去ろうとしていた彼女に声をかける。

「そうですね。おい礼依さん、夏貴も呼んできてくれ。そうそう、この方たちの顔を覚えるのを忘れずにな」

「はい。只今」

彼女が去ると、中森警部は尋ねた。

「あのー、どうして彼女が我々の顔を覚える必要が？」

会長は手をポンとたたいた。

「ああ、忘れておりました。彼女は駒沢礼依さんこまざわといって、孫の世話係なんです、ここの警備の責任者でもあるんですよ」

「え！？か、彼女が！？」

素直に驚く警部に、会長はからから笑った。

「まあ、驚かれるのも無理ありません。彼女は、ああ見えて東大工学部を出ておりました、記憶力も抜群なんです。私自身、彼女には全幅の信頼をしております」

驚く面々。才色兼備とはまさにこのことだ。

礼依に連れてこられた少女は、無表情に捜査員たちを見回すと、

一言。

「もついい。戻る」

予想通りだったのだらう、苦笑する礼依をよそに、会長が呼び止

めた。

「こら夏貴！今夜、あの泥棒からルビーを守ってくれる人たちだぞ！きちんと挨拶せんか！」

祖父の苦言に、夏貴はやれやれといった様子で振り向くと、警視庁の面々を睨みつけた。

「あれ、あげないから」

「え？」

声を出した警部に目標を定め、続ける。

「あれ、あたしのだから。おじさんたちにはあげない」

それだけ言って、今度は本当に去った少女を見ながら、警部は恐る恐る訊いた。

「もしか、例のルビーはあの子が？」

「ええ、買ってやった時はそうでもなかったんですが、キッドから予告状が来てからは、随分と執着するようになりまして。今では部屋から出さない有様です。礼依さんの頼みでも出さないとは、相当気に入ったんですね」

ボヤク会長。しかし、警部は逆に笑顔になった。

「そうか、それならさすがのキッドでも、そうやすやすとは手に入れられまい。よし！各員は予告20分前になったら、あの子の部屋のまわりを固める！」

その後、次々と出される指示に従ったふりで動きながら、快斗はあの少女の顔を思い出していた。

警察も会長の警備も、出し抜く自信はある。用意もしてきた。けれども。

今回は、正面から試してみようか。

細工を弄するより、正面からいった方がうまくいく……そんな、予感のようなものがあつた。もちろん、サポートも仕掛けておくが。

あの子、言葉で通じそうな気がする。なぜかわからないが、そう

白い翼をはためかせ

思
っ
た。

前編・紹介（後書き）

これも、短編にするつもりだったんですが……。書いてる途中で、「うわ長っ!!」と気付き、前後編に。後編はいよいよ本番です。

白い翼をはためかせ

後編・本番

あたりが暗くなり、別荘全体がライトアップされた頃。警官の変装をといた快斗はキッドの衣装をまとい、建物の外から夏貴の部屋へと回りこむ事にした。

もちろん、警官がひしめいている。が、そんなもの問題ではない。難なく部屋の窓にたどり着くと、ガラスを軽くコンコンたたいた。

部屋の中で、ルビーを手につずくまっっている少女が、振り向く。

「こんばんは、お嬢さん」

一応、キッドらしい言い回しで挨拶するが、警戒は怠らなかった。なにせ、したことの無い賭。途端に警官を呼ぶ可能性もある。

そして 彼は賭に勝った。夏貴は一瞬で笑顔になり、窓枠に乗る怪盗に抱きついたのだ。

「泥棒さんだー！ ホントに来た！」

ついで、背後を振り返って指を口に1本立てた。

「おじいさまも、おじさんたちも呼んじゃだめだよ！」

その視線をたどり、キッドの目は全開になった。

窓から見たら陰になる所に、駒沢礼依が立って、しかも通報もせずには微笑んでいるのだ。

(おいおい……何だよこの女)

困惑するキッドをよそに、夏貴はルビーを取り出す。手元の時計を見て、なんと差し出してきた。

「これあげる！ あげるから、お話聞かせて」

「…話とは？」

「泥棒さん、色んな所に行ってるんでしょ？ そのお話聞かせて！ じゃないと、おじさん呼んじゃうよ？」

……別に呼ばれたところで大した事じゃないが、予告まで時間も

あるし、楽にルビーを手に入れる対価だと思えば、安いものか。

キッドは、かみくだいて今までの仕事を語った。ほんの10分の話だったが、夏貴は目を輝かせて聞き入った。

「お嬢様、そろそろ時間です」

腕時計を見ながら、礼依が話割り込んだ。夏貴は「えー？」と口を尖らせながらも、約束通りルビーを差し出した。

「ありがとうございます！はい、これ」

「嬉しいのですが、これはお気に入りではなかったのですか？なぜ私に？」

夏貴は目を点にした後、くすくす笑った。

「別にこんなの、どうでもいいよ。でも、これ持ってたなら、泥棒さんとお話できると思って。あたし、泥棒さんの大ファンだもん」

なるほど。警察に渡してしまうと、嚴重な警備下に置かれ、取引の材料にできなくなる。だから、部屋から出さなかったわけか。

「お嬢様、警察の方を呼びますよ」

「はい」

ビ
！

けたたましい音が鳴り響き、警官が部屋になだれ込んできた。すかさず窓枠に乗り、ハンググライダーを広げたキッドは、目の前の光景に驚いた。

こちら側だけ、捜査員が一人もいない。

「大丈夫ですよ、情報を操作しておきましたから」

いつの間に来ていたのか、背後に礼依がいた。キッドは不審さを否めない。

「…なぜ、私を助けるのですか？……あの子が、私のファンだから

ですか？」

だとしたら、随分身勝手な人間だ。仮にも、自分は犯罪者。

礼依は部屋をチラッと見て、夏貴が捜査員に保護され、聞いていないことを確認した。

「ただのファンじゃありません。あなたは、お嬢様の希望なんです」

「……？」

礼依は心なしかうつむいた。

「お嬢様が病弱で、ほとんど出歩いたことがないという事は、ご存知ですか？」

「ええ」

「ですから、白い翼を羽ばたかせ、世界中を自由に駆け回るあなたに、お嬢様はずっと憧れていました。今回、ルビーを会長にせがまれたのも、あなたが狙うかもと思ったからです」

「……そうですか」

なるほど。だから、自分が知らない……いや、知ることができない、世界の話を知ったのがったのか。ほんの10分のことでも。

「ですから、万が一にでも、ここで捕まって頂くわけにはいきませ
ん」

「……しかし、会長には叱責されるでしょうね。あなたは、警備の責任者でしょうか？」

礼依は自信ありげに笑った。

「私は、お嬢様の1番のお気に入りです。他の誰もお嬢様を言い含めることは出来ませんが、私ならできます。ご心配には及びません。後でルビーを返して頂ければ、問題ありません」

彼女は、あたりの様子をつかがった。さつきより、明らかに騒がしくなっている。

「そろそろ、ここにも捜査の方たちが来られます。……ご無事で」
最後には、客人でも送るように、一礼した。

夜空を飛びながら、キッドの脳裏に、あの少女の笑顔が浮かんだ。
自分は、世間的に見ればただの犯罪者。近づくのは、報道関係と野次馬、そして警察関係者のみ。そう思っていたが。……そんな風に思われる存在でもあるのか。

翌日、新聞に、『怪盗キッド、またお宝をゲット!!』という文字が躍った。

後編・本番（後書き）

思えば、キッドを小説で出すの初めてです。

なぜこんなに礼依さんの扱いが多いかといえば、元々彼女を主人公にした話を考えていたからです。

それが、彼女は本当は、会長が孫のために作ったロボットで・・・という話。「機械メーカー」と「東大工学部卒」はその名残です。

少しでも心に残ったという方、評価や感想など下さると嬉しいです。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0898d/>

白い翼をはためかせ

2009年3月24日09時04分発行